

永劫流転の衆生の上に

覚めゆく悶え

鳴りひびく鐘の音

同じような仕事が毎日くくり返されて一日二日と月日が流れる。毎日機械のように食い、機械のように働き、機械のように寝る。それで満足し、それだけで、感謝もなければ悶えもない日暮しが十年一日の如く続く。

「覚めよ！ 目覚めよ！」

鐘をつく音がする。その異様な音が聞くとはなしに耳に入る。聞くまいとしても聞くまいとしても、耳にさからう嫌な音が耳につく。

「目覚めよ！……」

今までは、その鐘の音が外から聞えると思った。然り、外から聞える。益々はつきり、益々声高く、権威ある日覚めよの声が堂々と厳肅に聞える。けれども、今は単に外からばかりではない。

「目覚めよ！…… 覚めよ！」 その消すことの出来ぬ、人間の業とも思えぬ厳肅な声が内に聞える。而して外と内との声が共鳴りをはじめていないか。外からの声なら耳をおおっていることも出来るけれども、今ははや、耳をおおっても、内から聞える。朝も聞える。夕も聞える。起きても聞える、寝ても聞える。

卑怯

「目覚めよ！……」

その声の厳肅さに、気味悪さに、その声をごまかそうとする。卑怯なる汝よ！。しかし、ごまかしたり、さげたり、消したりすることが出来ると思うのか。否、そうした卑怯な態度をとろうとすれば、いよいよはつきり、益々高く、堂々として汝の心霊の扉をうつではないか。

卑怯なる人間は、この「目覚めよ」の声から遠ざかろうとする。内なる響をふき消そうとする。そうした卑怯なる、物おじした汝の態度、それが今日までの不徹底なる汝の生活を作ったのである。しかし、この上、この目覚めよの力の力をほろぼすことが出来ると思うのか。

知識を慕ふて

「目覚めよ！……」

じつと耳をすまして、その声を聞こうとする。いったい、何をせよというのだ。何を目覚めよというのだ。

おお汝は、ついにその声に耳をそばだてはじめた。もつと聞きたい。「音なき音」「声なき声」その響の中には、世間から来る一般の声とは違った、もつと本質的な深い何ものかがあるように思える。一体、この「無言の言葉」は何を意味し、何を叫んで

いるのだ。この声の本質的な言葉がもつと、はつきり知りたい。そこにあなたの足が、先覚者のもとに出発する。

伸び得ぬ悶え

一、小学校卒業の時の友人を思い出す。ある者は、中学校、高等教育、大学まで卒業して、今は堂々な紳士となつて、相当の地位と名誉と尊敬とを受けている。それにひきかえて私は一生を百姓で草深い田舎に、名もない凡人として生きてゆかねばならぬ。我が身の不幸を思う時、何物かを呪い続けたい心さえする。

一、友の誰彼は、高等女学校を卒業した。そうして今は、見てさえ幸福らしい高等官の奥様であり、大実業家の奥様であり、学者の一家の主婦である。それにひきかえて、自分は家が貧しいために、女工となつて工場に通わねばならぬ。深く考えた時、哀愁の涙が、たった一人の月の夕、さめぎめと頬を流れる。

一、老いたる父母、幼き弟妹、それらをおいて、青雲の志にまかせて、都会に走ろうか。そこには、人間の幸福と、無意蔵の学問とが私を待っている気がする。思つただけでも仕事が手につかぬ。心のうちから複雑な声が聞えて来る灰色なる今日一日。一体私はどうすればいいのだ。

一、真面目に生きている者ほど馬鹿げた気がする。正直に働けという学校の先生の言葉が今の自分にはちつとも有難い言葉ではない。否、正直というような道徳は旧い過去の人の言葉であつて、それを蹂躪しつくした所に強い人間の歩みがあるような気がする。しかし、どうやら頭の中には亡霊のように動き出る心がある。どつちつかずの毎日が嫌々ながらも続いて、月日の流れに引きずられて行く。そうした悶え、いたいどうすればいいのだ。徹底した声が聞きたい。

一、農村の夜間補習学校をのぞく。暗い電燈の下に、夜は更けるのに、二三人の影しか見えぬ。新学期がはじまると数十人の青年の顔が見えたものを、一月二月とたつと、一人減り、二人逃げ、今ではこの有様である。この有様では教える先生にどうして元気が出よう。算盤の計算法もいい。農業科の肥料論もいい。漢文の巻一もいい。けれども、何時までもそうしたもので満足の出来ないあなたの心。何か求めたい。飽くことなきこの無限の求めをどうすればいいのだ。教育を受けた昔の友人が、「君これを読みたまへ、君のように精神的な人にはいい本だ。これは僕を近頃一番深めてくれた書物だ。」そう言つて貸してくれた。むさぼるようにして蔑んで見るが、さつぱりわからぬ所が多い。誰かほんとに導いてくれる人はいないか。これが真剣な農村青年の悶えではあるまいか。しかしそれよりもつと本質的な悶えがある。

本質的な煩悶

人生最後の勝利は、物質や、地位や、そんなものでないことは知っている。それは飽くほど知らされたことである。けれども、それを理論としては知りつつも自信がない。信じきれない。更にそうした世界に出たくても、今の自分にはそれが、生活されない。

家の老人たちが信仰に入れという。しかし何故に信仰に入らねばならぬのですかと問うて見た時、「それは死んだら地獄におちるからだ。死なない気でも、若い者でも死ぬるからね。後生の一大事に気づかせてもらわねば、おそろしいことだ。」といったつのお念仏していなさる。しかし私には、それよりも、もつとせつぱつまった悶えが心のうちにひらめいている。この悶えと宗教とは関係はないのか知ら。憧れるように寺院に足をかけて見る。しかしそこには、老人たちの享樂的な陶醉が嫌になる分でも、今のこの悩みには何の関係がない気がする。しかし過去の聖者たちが、宗教によつて人生の悩みから救われたという。それならばもつと、この私の悶えに根ざした道も説かれてあるにちがいない。ほんとの信仰の天地に出たいものだ。時々、深く考えぬく時、仕事さえ手につかぬことさえある。私は一体どうすればいいのだ。あなただつて、決して、盲目的に物質に走ろうとするのではない。宗教に反対するのではない。道徳に反逆こうとうというでもない。しかしその本質にふれないのだ。

農村をやたらに去ろうというのでもない。是が非でも家を棄てて逃げるといふのでもない。農村におれば農村で、家におれば家において、そこに深い意義を見出し、ほんとの向上をたどることが出来るならば、そこに満足し得るのだ。

死せる生活

一家の中においてさえ、父は一も金、二も田地、姉や妹は、美しい化粧と、派手な衣服を好む以外に何の自覚もなければ、理想もない。五人おれば五人がそれぞれ違つた世界を作つて五人が五様の世界に住んでおる。たまらぬ寂しさと空虚とが家庭を灰色にしてしまう。新旧思想の衝突、肉と霊との戦い、時には、夕食後の一家に涙の悲劇さえ生れることがある。死んだ一家、死んだ生活、死んだ幽霊屋敷、とてもそれに堪えられぬ。世間から、更に、親の口からさえ、親不孝者だとの批難さえ受ける。しかし孝とは何なのか。孝の本質は何なのか。自分はこれがいいと信じながら、これが正しいと信じながら、もつとと言うならば親の要求が全然間違つており、深い世界からの声でない時でも、それに盲目的に従わねばならぬのか。それでは、自分は精神的に死ぬるではないか。ここへ、徹底的な教えを聞かせてくれる者はないのか。この矛盾へ鉄槌を下し、もつと自分の心をはつきり知らせてくれる世界はないのか。そうしてこの家庭を根本的に救うことは出来ないのか。

人格者

「目覚めよ………目覚めよ!。」

過去の偉人たちの撞いた鐘の音が、今の私、現実の胸のうちに鳴るのが聞える。

「私は全く現代のあらゆる社会を見て憤慨にたへませぬ。ついに私を導く人を全ての社会に見出すことが出来ませんでした。」

こうした言葉をもらす青年がいる。私はこうした青年にあつた時、いいようのない寂しきを感じず。ほんとにあなたの心の鐘の声をはつきりさせてくれる人はなかつたのか。

いなとよ。あなたを導く人格者がいないという前に、あなたの心霊の奥底には、ほんとに、久遠の過去から永劫の彼方に、無始無終に鳴りつづける響きはゴーンゴーンと聞えているのか。

もしあなたが言うごとく人格者が一人もないならば、あなた自身がその人格者とならねばならぬ。けれども、釈尊も、ソクラテスも、それら過去の偉人聖者は、皆、心の底からの底なき深さから流れ来る響きに耳をすまし、その声をききわけ、それを説いた人たちののだ。聞けよ、外から肉身をとおしての叫びごえは、内からの鐘の音と合致するではないか。更に、耳をすまし、目をみひらいて聞こうではないか。見ようではないか。吾人の前には吾人を救い、光の天地に導いてくれる教えの何ものも大正の今の時代にはないだろうか。

寂寥

語らぬ星

静かな夜である。

河の水が音も立てず流れる。

空が一面に晴れて、無数の星が輝く。

久遠の神秘、名も知らぬ無数の星が無言に輝く。

私はたった一人来り、たった一人立ち、たった一人考えている。

大地は暗黒にとざされて、微風さえない。

永劫流転の我を抱いて、

無間の彼方に輝く星の一つ一つを見つめる時、

神秘の外に何があるう。

不思議の外に何があるう。

古往今来、かくして天空に星は輝いたであろう。

そうして私のように、地上から涙を通して星を見上げて、

解き得ぬ神秘に幾人かの人たちが驚いたであろう。

おお寂しい天空よ。

汝は何故に無言なのだ。

何故にこの神秘について語らぬのだ。

汝は何故に知り得ぬ謎を有するのだ。

知り得ぬ私の過去について、私の未来について、

世界の終焉について語らぬのだ。

そもそも汝は何故に、永遠の沈黙者なのだ。

寂しき者は求める

現代人は金を見て笑う。地位を得てほほえむ。そうして何の寂しみすら知らないように見える。

星を見て、星の言葉を聞く人は少い。地上の花を見、草叢の露を見て、大地の神秘について考える人は少い。更に、無始無終に続く天地の間に今、生きておる神秘について、絶対の寂しさについて涙する人はない。私だけこうして永劫流転の我を抱いて絶対の寂しさにひたらねばならぬのか。

覚めた者は寂しい。何をもつておきかえようのない、何をもつて消すことの出来ぬ寂しさをもつ。寂しいと言つてじつとしていらぬ寂しさである。私の周囲には、にぎやかに人生を渡つて行ける人は集つて来ない。来た人も来た人も寂しい人である。心の傷をどうすることも出来ぬ寂しい人たちを見た時、私はたまらなく寂しい。私の力ではどうにも出来ぬから、と言つて色々なものに酔うて自分の魂を見失っている人を見れば更に淋しい。

あなたは淋しい人であつた。誰と語ることも出来ず、何でもまぎらすことも出来ぬ淋しさを持つた方であつた。そのあなたの前に、それよりももつと大きな淋しさを持つた人の世界に生れ出でたいのであり、生れ出づるものである。

あなたは私の住して頂く世界に往生した。それならばあなたの淋しさはなくなつたか。いいえ、もつと大きな寂しさがおそつては来なかつたか。

「人とお別れした寂しさをはじめて真に知りました。寂しい中に、指折つて待つ間の楽しみで御座います。三日間の講演はすぐすぎてしまいます。すぎてしまつて、先生をお送りする時の悲しさ、自動車の出てしまつた後の空虚。日がたつにつれて沈みきつた寂しさが私の全体をおおうてしまいます。けれどもこうした中にも心は常にお念仏に……」

それがあなたのみ心の全部である。寂しいのが嫌であるならば、目覚めないことである。目覚めた者は寂しい。さびしいが故に動き求める。そうして、光の世界に進む。求道は覚めたる寂しい人の心に生れる世界である。

真実の世界に生れ出んとする者は、善知識の世界に往生しなければならぬ。信ずる知識の世界に往生することが、やがてより大きな光の世界に往生することである。

親鸞聖人の味われた世界に生れ出ないでは親鸞聖人を知ることが出来ない。釈尊を知るということは釈尊の世界に往生することであり、弥陀を信ずるとは弥陀の世界に往生することである。

過去の多くの大宗教家も、大芸術家も大哲学者も、皆な寂しい人たちであつた。彼らは真に覚めた人たちであつたからである。もし少しでもそうした人たちの世界が知られて来た時、あなたもまた寂しい世界を持つた人となるのである。

聖者偉人の胸中

有名なる宗教学者がある。深淵なる学説がその口から説かれる。然るに時代はその学者をおきざりにして走つて逃げ、集つた民衆は何の関係もない路傍の人として見むきもしない。何故だろうか。彼は学者であつても人ではないからだ。いかめしい

肩書ではあつても、痛ましい衆生ではないからである。彼は哲学に飾られた学者ではあつても、偽らぬ心をなげ出して地にぬかずく涙の人でないからである。熱がないからである。寂しい世界を持たぬからである。議論も哲学もぬぎにした涙のながさと、寂しさを知らぬからだ。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人が為なりけり。」と言つたり、「この上は念仏をとりて信じたてまつらんともまた棄てんとも面々の御はからいなり」といつた親鸞は決してにぎやかな人ではなかつたのだ。二河白道を説いた善導大師は、人の運命を、人一人おらない無限の曠野を西にむかつて旅する寂しさに譬えたではないか。天上天下唯我独尊と叫んだり、独生独死独去独来と教えた釈尊も亦、浮いたにぎやかな世界に生きた人ではないのだ。

十二人の使徒たちを残しておいて、一人ゲッセマネの園に入つて、神に祈り、いよいよ十字架にはりつけられて、死すべき運命の前に「アバ父よ爾において、凡ての事能はざるなし、この杯を我より取りたまへ。然れど我が欲ふところを成さんとするに非ず。爾が欲う所に任せたまえ。」と神に祈り、いよいよ十字架の上にはりつけられて息たえんとする時、「エリ、エリ、ラマサバクタニ」(吾神わが神何ぞ我をすてたもうやといふこと。)と叫び、下より、海絨に醋をふくませてささげられ、それをすうて息のたえたキリストも断じてにぎやかな心ではあるまい。

道を説けど説けども、世の中に入れられなかつた孔子の心、真理のために毒杯を飲んで従容死についたソクラテスの心、「鳥は啼けども涙流れず、日蓮は泣かねど涙ひまなし。」と言つた日蓮の心、国家を思う真心は入れられず、多くの子弟や家来の血氣におされて官軍に弓を引き、ついに薩南、城山に自殺した大西郷の心事。

噫。彼ら偉人、聖者の全てが、地上の寂寥を味いつくしたのだ。

「覚めぬがよい。目覚めぬがよい。」

あなたにそうした心はないか。

愛の世界

寂しさを知らない者に真の愛はあり待ない。真に切るに切られぬ、一つにとけた愛の世界は、寂しさを持った者同志の間にだけ、生れて来るものなのだ。

「愛は、寂しさから生れる。」

魂の底に、この動かすべからざる命題が権威をもつてうなる。寂しい人は、一人一人でも失いたくない。皆の人に、至心信樂して、我が国に生れて来てくれといいたくない。そこに魂と魂との融合うた一如の世界が生れて来る。

夫婦が真に愛しあう日も、親子が真に結ばれてある日も、師と弟子とが一つ世界を歩む日も、それは、真に淋しさに裏附けられた日のみである。

しかし、愛すれば愛するだけ、さびしくなり、愛しても愛しても、無限のさびしさがおそうて来る。それだから、人を求めることはやめたという人があるならば、それは、そこに腰を下していることの出来待る程度の寂しさである。

求めても求めても寂しい。それで満足ということがないままに、でもやめ得ない、やめえないままに飽く日がない。そこにほんとの愛の深い世界が転回されて来るのだ。

あなたが指折り数えて私が講演に行く日を待って下さる心、それにひきつけられて飢え渴く如く走りつづける私、そうして三日間四日間がたつて、挨拶もしないで泣いて別れる時の寂しい心、その寂しいお互の心こそ、次ぎ次ぎと共につながりながら、やがて白道の上を浄土にむかつて精進せしめられる心ではないか。

「生命の創造はさびしい世界から生れる。」

さびしくない者は動かぬ。求めぬ。覚めやらぬ浮いたにぎやかな心には、芸術も道徳も宗教も生れたためしはあり得ない。

真仏のみ声

さびしい心に覚めたとは、永劫流転の我に目覚めたのであります。衆生たることに目覚めたのであります。無限の曠野に立てる我を見出したのであります。ちつともとどまることの出来ぬ我を見出したのであります。何ものを持つても如何ともすることの出来ぬ我を知ったのであります。一筋道を走らねばならぬ自分を知ったのであります。

おお覚めゆく心 無限の時と、無限の空

久遠の眠りから覚めゆく心！

無始無終に続く心の眠り！

六道輪廻の痛ましい様に覚めゆく心！

愛に覚め 迷に覚め

寂しさに覚め！

道を求め！ 人を求め！ 光を求め！

求め求めて、立ちあがる汝。智恵の眼を開いて前途を見よ！

黎明の光は汝の行手に輝き、汝のその精進努力を祝福するように、紫金の色は汝の行手を莊嚴しているではないか。

更に汝の智恵の耳をそばだてて聞けよ。平々坦々汝の歩む彼方から仏は

「汝一心正念にして直ちに來れ！ 我よく汝を護る………」

とよびたもうてあるではないか。

我を救う真仏のみ声は、寂寥の汝の上へのみきかるるのである。天を仰いで星をながめ、地に伏して大地の静寂をきく。我にかえる時、我が口より念仏の出たもうを知る。